

タテ線譜メソッドとは何かーⅠ

ーさまざまな視点からメソッドを考えるー

話題提供者

タテ線譜メソッド指導者： 阿方 俊（昭和音楽大学、メソッド考案者）、 五十嵐 優（昭和音楽大学付属音楽・バレエ教室）、内田智子（東京藝術大学大学院）、秋谷万里子（和幸楽器）

タテ線譜メソッド試験的実践者：友永和恵（平成音楽大学） 垣浪文美香（東京学芸大学附属小学校）、斎藤康之（木更津工業高等専門学校）

タテ線譜講座受講者：星野 博 坂井康司（昭和音楽大学付属音楽・バレエ教室受講生）

その他： 原岡和生（洗足音楽大学）、和智正忠（医学音楽研究家）

司会：阿方 俊（昭和音楽大学） 書記：小沢真弓（NPO いちかわシャンテ代表 文責）

進 行

このラウンドテーブル（円卓会議）では文字通り机を円卓状に並べ、参加者がお互いに顔をあわせ、映像記録などを共有しながら進められた。また、後半の研究発表③・⑥がこの内容に関連したものであるため、関係する事例報告の一部はこの後の発表時にも行われた。

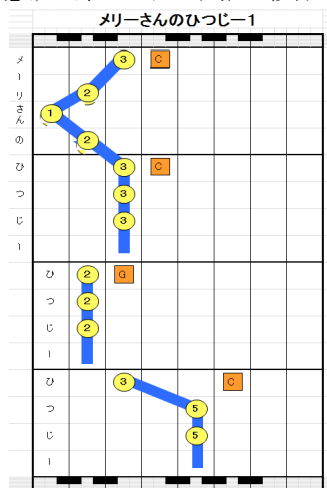
「タテ線譜」によるシニア対象の鍵盤楽器導入が始まって5年が経過し、様々な音楽分野に試験的に導入され始めている。メソッドとしての役割を明確にし、将来に向けて有意性を確立させるべく、実践者の経過発表とともに参加者も自由に意見を交換した。

さまざまな事例

1 昭和音大付属教室のシニア対象講座の事例

（阿方、内田）

タテ線譜をシニア向け電子キーボード教室で継続して使っているが、使い続ける受講生と、徐々に5線譜に移行する受講生の2通りに分かれてきた。しかし5線譜だけで始めた人よりもスムーズに理解できるようで、本人に意欲が芽生えれば自然に移行していく。



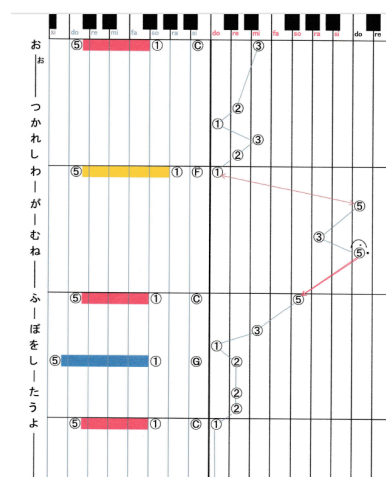
タテ線譜導入に用いられる「メリーさんのひつじ」
レッスン時は「楽しい時間」を共有。電子楽器の特

徴から、さまざまな楽器や音楽に興味を持ち、音楽鑑賞に発展していった。

2 和幸楽器（さいたま市）シニア対象講座の事例

（秋谷）

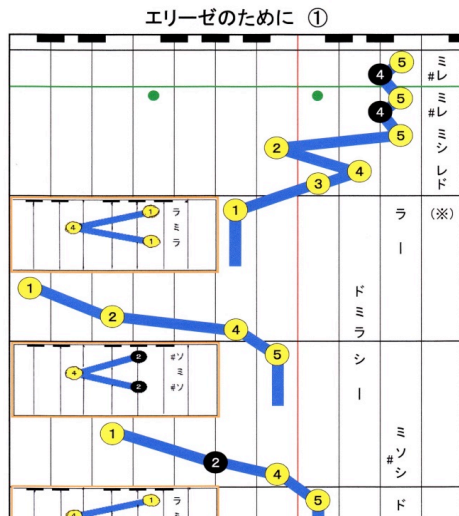
午前中の空き教室の活用と地域のコミュニティを作るという楽器店の目的もあり開講。月1回、約1年継続中。「憧れの鍵盤楽器を弾ける」と言う長年の夢を実現させる希望が持てると、受講者に好評を博している。五線譜は決まりごとが多くて楽しめないが、タテ線譜使用の場合、その日に両手での演奏を達成させることができる。さらに秋谷氏は必要に応じて、タテ線譜内に休符、左手の範囲部分を加え、伴奏コードの「記号」を加筆したものを作成し、改良を試みている。テキストの色分け、コントラストなどは、白内障など、シニアの加齢による視力低下に対応して作成した。加筆制作したことで、譜の機能が五線譜大譜表に近づき、五線譜導入にもなった。また、加筆制作したタテ線譜によって、マイペースで自習ができるようになった。シニア受講者の「楽譜を見ながら演奏してみたい」という憧れを満足させることができる新しい試みである。



秋谷氏手書き楽譜「スワニー河」

3 受講生からの報告 (星野)

鍵盤楽器経験なし。4月から昭和音大付属教室のシニア対象講座受講。購入した電子KBの付録に5線譜「エリーゼのために」があり、それを見て演奏するのは無理とを感じる。教室でタテ線譜メソッドの同曲に遭遇し、演奏できた。タテ線譜の印象は、経験のある尺八の譜面と同じだと感じ違和感がなかった。



星野さんが楽譜（五線）の知識なく弾けたタテ線譜「エリーゼのために」冒頭部分

4 木更津高専「超初心者」むけ講座事例 (斎藤)

90分単発講座を企画・実施。13人の学生が参加。鍵盤楽器は未経験がほとんどだが、1時間後には両手で演奏することができた。アンケートでは楽しかったという回答が多数。(研究発表③参照)



90分単発講座レッスン風景

5 東京学芸大附属大泉小

鍵盤ハーモニカ授業の事例 (垣浪)

今年9月～10月の約1か月の間に小学校の音楽授業で、1年生3クラスで3～5回、6年生1クラスで1回実施し、曲は「メリーさんの羊」で実施した。

5線譜を読めない生徒は鍵盤の位置と音符の関係が理解しにくい、タテ線譜は図として位置関係を理解するのに適しており、指番号が記してあり具体的で、苦手意識を持たずに取り組むことができ、視覚的にわかりやすいことから、自発的に演奏できるようになる

と考えた。1年生には正しい指使いでの演奏を目標に、6年生では和音伴奏をつけてアンサンブルを楽しむことを目標に指導を行なった。

6年生の授業では、開始から10分経たないうちに、ほとんどの児童が演奏できており、その後は、友達と2人組や4人組になってアンサンブルを楽しむ様子が見られた。6年生は、これまで五線譜を用いて鍵盤ハーモニカの演奏を行ってきたが、それまでは意欲的でなかった児童が積極的に演奏するなどの変化も見られた。実践後にアンケートを行ったところ、特に鍵盤楽器未経験者には「弾きやすい」「わかりやすい」「指の位置がわかりやすい」「次にどこに行けばよいかわかる」「面白い」(フリー記述より)とおおむね好評であった。このことから、今後は、これまで五線譜での鍵盤ハーモニカの学習を行ってきた2～6年生に対しても臨機応変にタテ線譜を使い、児童の鍵盤ハーモニカに対する苦手意識を克服させたい。また、低学年の時から、左手の和音をつけて主旋律と合わせてグループでの演奏を行うことにより、楽しみながら和声感を養っていくことができるのではないかと考えている。

タテ線譜による鍵盤ハーモニカの学習を継続し、楽譜が読めない鍵盤未経験者の児童の変容に注目していきたいと考えている。

6 平成音大 ピアノ未経験学生への実施例 (友永)

知っているメロディであることが前提。階名で歌い、指番号をつけると自動的に演奏に移せる。ブラインド奏法や二和音によるコード奏法などは導入としては満点の方法。同時に将来の課題として休符、付点音符の表し方、ソルフェージュなどに疑問・問題点も感じる。(詳細は研究発表⑥参照)



講座後の記念撮影。参加者の笑顔が印象的

7 ポータブル電子キーボードを用いたボランティア活動実施状況 (坂井)

昭和音大付属教室のシニア対象講座受講生が単独で始めた老人ホーム訪問ボランティア活動の発表。

懐メロなど歌謡曲にあわせて、持参したキーボードを特別養護老人施設の入所者に弾いてもらう。手が不自由でもリズムをとることはできるので、音色

をパーカッションにし、拍子をとるなど、リズムを弾いて（叩いて）もらう。当初は自身が修得したタテ線譜を用いて楽曲を弾いてもらおうとしたが、認知症患者には無理なこともあり、徐々にこの形に定着して行った。弾けると次から自発的に弾き始め、我も我もと順番待ちの行列ができるほど。施設の古い電子オルガンを活用することもある。

さまざまな視点から

A タテ線譜の存在 (原岡)

邦楽用の楽譜の主流はタテに進行するいわば「タテ線譜」といえる。タテに読み進むことは日本人にとって当然。外国の人々にわかるようにしたいと考えている。そこで、邦楽の代表曲「ひとりで奏でる春の海（宮城道雄作曲、高橋久美子編曲）」の演奏にタテに進行する邦楽譜をシンクロさせ YouTube に公開した<https://youtu.be/NOX2u7de-8k>。公開後 1 か月ですでに 50 か国以上の方が視聴し、タテ線譜の普及に効果があるといえるのではないかな。さらに、発表者の技術を応用することにより、タテ線譜から五線譜の垣根を取り払うことが期待できる。

B 海外での実施と感触 (阿方)

中国と韓国でこのタテ線譜を紹介する講座を開いたが、受講生には大好評であったにもかかわらず、逆にピアノ指導者には「拒絶反応」が多かった。いずれ 5 線譜を読む必要があるのだから回り道すべきではないと考える傾向にあり、音楽を楽しむという観点からはほど遠いものがあった。もっとも、日本の場合も大同小異であるが…。



横断幕「祝日中シニアピアノ指導法交流活動研究会」

C 音楽療法的効果 (和智)

タテ線譜を使ったレッスンの後は『笑顔で帰る』、また、アンケート結果にあった『楽しかった』『面白かった』…という感想に注目すべき。音楽を楽しむと気分状態が良くなり、神経内分泌系を介して免疫状態が良くなる。その結果ウイルスなどの病原体に対する抵抗力があがる。

D 鍵盤楽器以外の楽器 (小幡・電気通信大)

タテ線譜は音楽の難しい印象を取り払うもの、との印象を受ける。学ぼうとする全世代に有効な手法ということで、鍵盤楽器以外の楽器研究者としても参考になった。

考察

メソッドを使った指導には、【歌う～指番号の机上確認～鍵盤演奏～聴きあう】というパターンができており、初心者向けにはすでに高い効果をもたらしている。実践はシニアへの初心者指導から始まったものだったが、試験的に行われた講座や授業の例から、シニア～若年層～小学生の全世代対象のメソッドになり得ると考えられる。また、五線譜への自然移行、音楽全般への興味、ボランティア活動への発展性なども引き出しており、新しい音楽の享受法という側面も併せ持っていると言える。

しかし、研究発表⑥の中で友永氏がのべているように、現段階では導入の部分で効果をもたらしているにすぎず、教育、音楽療法、芸術、情報技術といった様々な分野からの研究がもっと必要になってくる。その結果、それぞれに発展の方向は異なってくるかもしれないが、価値が定まっても来るだろう。

発表に対し様々な観点からの意見が飛び出した。

「タテ線譜は従来の五線譜の代替になるか？」

「若者向けに、指番号までプログラムし点数をだせるようにしてゲーム化してみたい」

「フレーズの表現方法をあらわすには？」等々

最初に、発表者が、このタテ線譜メソッドを使用するにあたっての条件を「初心者むけ」「五線譜の導入」「五線譜使用移行への手段」と位置づける提示をしていたのだが、タテ線譜の持つ画期的な機能性と、その使用が老若を問わず歓迎されたという事例から、『万能』化へと一足飛びに考えるのは尚早である。

（ソフト等の開発に関してはもっと慎重になるべきで、手指の大きさには個人差があり、指番号は一つだけではないということをソフト開発者に指摘しなくてはならない。使用できる対象を広げ、万人向けをはかろうとすれば、現代では手指欠損、片麻痺などの障害者対象も眼中に入れねばならなくなる。）

企画者の阿方氏によれば、この『タテ線譜メソッド』とは何か-1』は序であり、2、3と、様々な観点からの考察を続けたいということである。さらなる実践研究や議論などを経て、この画期的なメソッドが各分野において明確な新しい役割を担うことを期待したい。